

# アジアにおける通貨問題の将来<sup>(注1)</sup>

近 藤 健 彦

## 要 旨

今後のアジア通貨問題の将来を論じ、過去十年間にアジア通貨単位のおおまかなコンセプトに合意があった点を成果としてあげ、今後スキームの主要点を各国間で合意していく必要があるとする。

〔キーワード〕 アジア通貨単位

## 序

Jean Monnet は回想録の中で次のようにいっている。

「人は一定の状況におかれると、利益が共通であることがわかり、そうすると合意し始めるものである。その状況とは人が同一のことを問題にし、すべての者が受け入れ可能な解決をはかる意思、もっと言えば義務をもつ場合である」。<sup>(注2)</sup>

アジアは国際通貨面で近い将来この条件を確実に満たすようになるであろう。

第1に、近い将来、人民元の為替レートがより自由に変動するようになるだろう。アジアがいわゆるグローバル金融に「より」統合されて

いく流れにあっては中国が資本移動の規制を徐々にはずすことは不可避である。そうなると必ずやドル、元、円、そしてウォンとの為替レートの間で相互に不安定な動きが出てくる。これをできるだけならさなくてはいけない。そうでないとアジアは通貨の不安定から高コスト経済になってしまうだろう。これはアジアのためだけでなく世界の利益にもならない。

第2にアジアでは通貨面ではおそらくドルも元も円もウォンもいかに強力でも単独では主導権はとれないであろう。また好ましくもない。とすればアジア関係国の協力による方向しかない。

## 1. ACU の概念

多くの論者はいぶかるだろうが、アジアの将来の通貨協力に対する答えは「論理的には」すでに出ている。「論理的」答えはアジアの中で共通の ACU (アジア通貨単位) を創出することである。この構想はアジアの知識人たちがこれまで10年かけて作りだしたものである。「論

(注1) 本ペーパーは、2007年7月23日、北京で開催された国際シンポジウム「東アジア共同体の共通制度を創る」(国際アジア共同体学会、中国社会科学院日本研究所 共同主催)での私の発表のために作成したものである。

(注2) Jean Monnet, Memoire, 1976 (Fayard) p.66.

理的には」としたのは「実際には」と区別する意味からである。この問題は「実際には」すべてこれからである。すべてオープンである。これからのアジアの人たちの行動にまたなければならない。

また誤解のないように、ACU はアジア「単一通貨」でない。あくまで「共通通貨単位」である。ACU の創出によってアジア各国の元やウォンや円が消失するのではない。ACU はそれらと並存する「パラレル通貨」である<sup>(注3)</sup>。提案されている構想は欧州で言えばユーロを作り出すのではなく ECU を作り出すことである。

ACU については日本に多くの著作がある。しかしそれが実現する道筋ははっきり示されていない。

私は前途をそう楽観的には見ていないが、さりとてそう悲観もしていない。悲観していない理由は、アジアの通貨統合は難題で実現するかどうかには確信がもてないが、もし何かが作られるとすれば ACU という通貨バスケットであろうとする点では合意がえられているからである。つまり抽象的なコンセプトについては合意がある。これは10年前にはなかったことである。概念についてすでにアジア内でコンセンサスが得られている点で、多くのアジアの統合項目の議論の中では、FTA とともに、通貨が、多くの人はそうは思っていないが、一番進んでいる領域ではないかとさえ思う。

なぜここまで概念整理ができていくかという私の意見では通貨単位というコンセプトが現代の IT 化、一種のデジタル化に近い性格を持つからである。通貨バスケットでは物理学でいうノイズの原理<sup>(注4)</sup>によって諸通貨間の上昇・下落がならされる。何より中国が2005年7月、

為替レートについて通貨バスケットを参照すると述べ世界の学者の注目を集めたことが大きなインパクトをもった。

## 2. ACU の具体化

ACU の概念についてアジア域内で合意が得られたとすると、次なる問題はスキームの具体的内容を確定することと創出のタイミングである。多くのアジアの論者達は現状、創出は時期尚早と考えている。

以下は本会合での私の新提案である。

すでに中国は通貨バスケットを政府が作っている。このすでにある中国の通貨バスケットを必要にあわせアジア向けに修正する。中国の通貨バスケットをベースに ACU を定義することを提案する。

中国の通貨バスケットの中には米ドルがすでに入っている<sup>(注5)</sup>。中国の元を、中国の通貨バスケットは中国向けなので入っていないが、ウェイト付けして、入れる。ウェイトは、中国の通貨バスケットは中国からみたウェイトであるが、これをアジア全体から見た貿易、GDP などのウェイトに改める。数字は全アジアベースであるが、ウェイト付けについての基本的な考え方は中国政府の考えをそのままアジア通貨バスケットに持ち込むことによって、物事の簡単化をはかることができよう。

## 3. ACU の原則

中国の通貨バスケットをアジア通貨単位に拡張するときに、私の意見では次の3つを指導理念にすべきだと思う。この点はいずれも論争的である。今後数年かけてアジア内で十分議論してアジアの人たちが合意に達したらいいと思う。この点がはっきりすれば後の合意は早いと

---

(注3) 例えば Williamson は「パラレル通貨」を高く評価していない。

(注4) 高安, 2003.

---

(注5) 花尻, 2005.

思う。逆に言うとこれが一致しないと進展は期待できない。

第一は、何のための通貨単位なのかをはっきりさせることである。私はアジアの通貨問題は為替リスクを軽減するその一点だと思う<sup>(注6)</sup>。ドルと元と円とウォンの間の為替リスクを完全に解消することはできないが可能な限り軽減するのがアジアの21世紀通貨協力の目的である。とすれば ACU は貨幣の3機能、価値尺度、支払い手段、貯蔵手段のうち価値尺度に純化してはどうか。欧州の ECU はこの点を価値尺度、貯蔵手段（外貨準備）の組み合わせで構成しようとした。21世紀に、IT 技術はさらに進歩するだろう。電子マネーはさかんになるだろう。そこで価値尺度という抽象的コンセプトだけで、外貨準備の面なしでも、最低限国際通貨を構成できないか。これが私の、人呼んで「ニュー

メレール通貨」構想である<sup>(注7)</sup>。そうなれば ACU はコンセプトとしては ECU をも超えた21世紀型の最新のものになるだろう。「ニューメレール通貨」とする理由の一つはできるだけ簡素なスキームとするためである。その方が多様なアジアで政治的指導者たちの理解が得やすいだろう。

第2の論点は通貨単位への米ドルの参加である<sup>(注8)</sup>。私ははっきりいってアジア通貨単位に米ドルの参加がないとアジア通貨だけでは力不足だと思う。私はアジア通貨単位は米ドルの加わったアジア太平洋通貨単位とすべきだと思う。前述のように、すでに中国の通貨単位に米ドルは入っているはずで、それに中国通貨単位では入っていない人民元を加えるだけで ACU の輪郭はできると思う。

第3は、技術的になるかもしれないが、アジア通貨単位はアジア共通「貿易」通貨単位というよりはまずアジア共通「資本」通貨単位として構成し徐々に貿易取引に拡大したらよいと思う。欧の経験では ECU は貿易取引にはあまり使われなかった。もっぱら ECU 建て債券に使われ「なじみ」を増していった<sup>(注9)</sup>。アジアについても、創出後の ACU はおそらくプロの金融関係者がまず使用しそれから一般人に広まる展開をたどるだろう。例えば ACU 建てでアジア開発銀行債を中国の内陸開発のため日本の投資家向けに発行することから ACU の活用を始めたらいと思う。

ちなみに日本人の金融資産は総額1500兆円、そのかなりの部分を中高年層がもっている。こ

(注6) この点についてアジア内ではまだ合意がない。アジア内では「アジア通貨基金構想」(1997年)、チェンマイ・イニシアティブ(2000年)、さらに最近のアジア各国の外貨準備の一部をプールする榊原構想(『日本経済新聞』2006年2月14日付)にしても、明示的にではなくても「流動性確保」、それもドル確保がアジア通貨協力の政策目標となっている。それだけアジア金融危機の衝撃がアジアに強かったということであろうか。私は一貫してこれに異論をとなえている。私の APEC ACU 提案(1995年)は円・ドル為替レート不安定さを踏まえての提案であった。その後の推移をみても1兆ドルの中国の外貨準備をはじめ、日本、韓国、台湾と、ドルは相対的にはあまりすぎるくらいアジアにはある。米が国際収支の赤字を続ける限り、米の有力な学者は米の赤字は受身でアジアのニーズに応えるためであると正当化するが、ドルの流動性確保は、少なくとも発展したアジア主要国にとってはグローバル金融体制のもと資本市場からの調達が可能であり、過剰にこそなれ不足する事態は考え難い。ということはアジアの通貨協力の問題は、流動性の問題ではないのである。この点でまずアジアの多くの論者の見解は私から見ると的を得ていないと思う。

(注7) Manuel F. Montes, 1988. p. 22.

(注8) 『フィナンシャル・タイムズ』2006年6月16日は米財務省当局者の発言として米は ACU に反対しないと報じている。

(注9) L'ecu, monnaie du success europeen, 1990, p. 295.

れら中高年層は為替リスクに敏感である。個人投資家としてドルよりもユーロに向け投資し、これが最近の円安・ユーロ高の一因になっている。中国では国が巨額の外貨準備をもって国際金融に大きな影響力を持つが、日本では中高年の個人投資家が影響力を増大させつつある。日本のこうした投資家たちはACU建て債券に、ドルやユーロ建てより為替リスクがならされるので魅力を感じるだろう。

## 結語

本報告で述べたことを要約する。

通貨バスケットそのものの論理的意味については異論は少ない。通貨バスケットはアジアで問題なく21世紀の主流になる考えだと思う。問題はどうかやって労少なくして益多いACUスキームをアジアで作り上げるかである。目下のところその道筋はまったく見えていない。本稿で私は中国の通貨バスケットをベースにすることを提案した。

結びとして大学の教師の一人として私はアジアの若い世代に期待したい。まったく違った斬新な角度で、われわれ20世紀の者と違う見方で、知恵で、21世紀のアジアをつくってほしい。

## 参考文献

- Jean Monnet, *Mémoires*, 1976 (Fayard).  
 Ernst et Young, The National Institute of Economic and Social Research, Association pour l'Union Monétaire de l'Europe, *L'écu, monnaie du succès européen*, 1990 (Les Editions D'Organisation).  
 Takehiko Kondo, *Towards the création of APEC common currency unit* (Paper for 1995 Europe/East Asia Economic Summit, Singapore 20-22 September, organized by World Economic Forum).  
 Manuel F. Montes, *Diagnoses of the Asian Crisis : Implications for Currency Arrangements*

- (Paper for the international Symposium on November 6, 1998, organized by JETRO).  
 近藤健彦『アジア共通通貨戦略』、2003 (彩流社)  
 高安秀樹、「経済物理学 為替リスクの解消に挑む」『日本経済新聞』2003年1月30日  
 John Williamson, *The Choice of Exchange Rate Regime : The Relevance of International Experience to China's Decision* (Paper for a conference on exchange rates organized by the Central University of Finance and Economics in Beijing on September 7, 2004).  
 花尻卓、「中国人民元の為替制度改革について」『ファイナンス』2005年9月